NIE
教育に新聞を

国語に道徳に 新聞使おう

写真見て それぞれの一句 ■ 投書読み 新たな視点

教育現場での新聞の活用について考えるNIE（教育に新聞を）の第25回全国大会（日本新聞協会主催）が22日、開かれた。コロナ禍を受け、「ともに生きる 新聞でつながる」をテーマに、オンラインで開催。講演やシンポジウムがライブ配信され、事前収録した小中高3校ずつの実践発表も公開された。

新聞の写真を題材にして俳句をつくる。東京都町田市立真光寺中学校の山田慎一教諭(36)は、3年生の国語の授業でのとりくみを発表した。

これまでは修学旅行や学校敷地内の散策などで題材を探していたが、限られた時間と場所では広がりが生まれにくい。感動の焦点を絞る「切れ」の感覚を養う難しさも感じていたことから、さまざまなテーマを扱い、1枚に多くの情報が盛り込まれている新聞の写真を使うことにしたという。

授業では、今年7～9月の新聞から各生徒が写真を選択。感じたことを書き出し、五七五にしていく。

多摩火薬製造所跡の写真を選んだ女子生徒は「戦後75年がたち、劣化してはがれていく壁や落ち葉から、戦争の記憶が薄れてきていると感じた」と話し、「病葉や傷のかけらに散り積もる」という作品に。「空飛ぶクルマ」の有人飛行実験の写真を選んだ男子生徒は、「暑い日に涼しい空に向かって車が上がっていく様子を連想した」と話し、「空中車涼しい空へ上りけり」という句をつくった。

「親を待つ立ち話の間水遊び」「汗と水小麦の足に光りけり」。暑さ対策のため、消雪パイプから水が出ている様子を子どもの姿と共に写した、同じ写真から詠まれた作品もあった。

山田教諭は「1枚の写真からさまざまな視点が得られた。また、教室にいながら遠くのことや過去のことに思いをはせ、生徒が新聞の写真の魅力に気づくことができた」と発表をしめくくった。

東京都世田谷区立喜多見中学校の木村要介教諭(27)ら3人は、投書を道徳の授業で活用。学校へのスマホ持ち込みとレジ袋の有料化をめぐる投書を用いた授業について、発表した。

生徒はまず「スマホ持ち込み」や「レジ袋有料化」について、賛否と理由をワークシートに記入。授業支援アプリ「ロイロノート・スクール」で共有する。続いて複数の投書を読み、友だちの意見や投書から得た新たな視点をワークシートに書き加えていく。その上で、あらためて賛否を記入。授業の初めと終わりで考えがどのように変化したかをふりかえる。

生徒からは、「自分と違う意見や視点を知ることができた」「良いと思っていたが、投書を読み、別の視点から見るとデメリットもあるとわかった」などの感想に加え、「同じ中学生が社会のことを深く考えて投書をしていて、私ももっと勉強したいと思った」といった声も上がったという。

木村教諭は「各生徒の知識量の差が出にくいテーマで、言葉が易しく、さまざまな視点で書かれた複数の投書を選ぶことは手間がかかる。しかし、生徒からは好評で、問題意識を高めることもできた」と手応えを語った。

同文京区立関口台町小学校の矢野篤彦教諭(43)は、4年生の総合的な学習の時間で、災害や防災、ＳＤＧｓについて学ぶ際の新聞活用例を発表した。

児童は教諭や自分が選んだ記事を読み、分かったことや感じたこと、自分にできそうなことなどを付箋やワークシートに記入。「誰に何を伝えたいか」を明確にしたうえで、調べた情報を「新聞」にまとめた。

矢野教諭は自校の児童について、「基礎学力は高いが、自ら課題を見つけたり、教材を自分事ととらえ、深掘りしたりすることが苦手だと感じていた」。

これまでの調べ学習では、「○○が分かった」など、1、2行の感想しか書けない児童が目立った。しかし、新聞を活用したことで、被災状況や食品ロスなどについて記事に書かれた具体的な情報を盛り込み、自分ができることやさらに知りたいことを書けるようになるなど、当事者意識や課題を発見する力が高まってきたという。（三島あずさ）





上 班ごとに選んだ俳句を黒板に書く、町田市立真光寺中学3年の生徒ら＝山田慎一教諭提供
下 文京区立関口台町小学校の4年生が災害に関する記事を読んで分かったことや感想を書き込んだワークシート＝矢野篤彦教諭提供

◎ 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。